

かくのごときのわれら

寺 川 俊 昭

(大谷大学講師)

しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのしくおぼゆるなり。

一

いつの頃からか、この言葉は私の心をとらえて離れない。『歎異抄』の言々句は、一つとして宗教的生の嚴肅さを秘めないものはないであろうが、ここにはその宗教的生の最も深刻な問題の一つが、まざまざと露出している。

もとよりこの言葉は、あの「念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜の心おろそかにそうろう云々」という、唯円房の切実な問に対する聖人のお答えの一部である。これを拝誦する時、遙かに第二章および第十九章と対応して、私はここに改めて〈宗祖〉を思う。この不審をいだいて、「いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と問う唯円に、自らの不喜不快の悲傷を内にこめつつ、「かくのごときのわれら」と同悲同感せられたところに、私は限りなく身近に宗祖を仰ぐのである。聖人は聖徳太子を、「大慈救世聖徳皇、父のごとくにおわします」と讃ぜられた。そこにはよき人法然上人との値遇という、空前絶後の大事件をまさに時熟せしめる縁となった六角堂參籠を中心とする、太子

の護持養育に対する聖人の深い謝念がこめられていた。同じ謝念をこめて、私は今、宗祖を思うことしきりである。「念仏もうしそうらえども」とは、わが現実である。「かくのごときのわれら」とは、この現実を包む師教である。この教言のところに、聖人は、荒涼たるわが精神界に限りなく同悲し、常にわが前に立ちたまう久遠の慈父である。一切の夾雑は風化脱落し、仏かねてしろしめしてあった「親鸞一人」の事実に戻り来て、慇懃に「煩惱具足の凡夫」のわが身を思い知らせたまう、久遠の魂の慈父である。この思念の、あまりに人間的であることを怖れつつ、私は今、この言葉を宗祖に捧げずにはおれないのである。

二

「念仏もうしそうらえども」という唯円房のこの問こそ、真に宗教的生の問題と言われるべきものである。もとよりこの念仏は、あたかも第二章において、「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰をこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と表白せられたあの念仏であり、従ってここでは、言うまでもないことであるが、念仏の真理性への疑惑が述べられているのではない。そして若し念仏の真理性が問題であるのならば、それは厳しい求道の苦闘をまつものであるけれども、師教との値遇というでき事によって、まさしく答えられるところの、或る意味で積極的な性格の問である。それ故に問題は端的であるとさえ、言うことができるかも知れない。

今、「念仏もうしそうらえども」と起こされた問は、しかしながら、これとは性格を異にする。それは人が教えに遇い得た、まさにその事実^{じじつ}に胚胎し、やがて時をまつて露わになって行く、宗教的生に特有の問である。しかも、「踊躍歡喜の心おろそか」といい、「急ぎ浄土へ参りたき心」のないという否定的な形をとっているだけに、或る意

味でむしろ根の深い問であると言わなければならないものである。

唯円房の提出した不審は、この二つの問を内容とした否定の問である。けれども最初に「念仏もうしそうらえども」と言われる限り、これはどこまでも念仏の身の上に起こったでき事である。宿縁深く、たまたま念仏往生の教えに遇い得た身にして、始めて見出した不審である。その身が今ふと気づく時、教えの中にありながらも、念仏との間に意外にも遠い距離が生じていた。はからずもそこに空虚さがひそんでいたのである。この事実に気づいて発せられた愕然たる驚きから生まれた問である。

この問は既に踊躍歡喜の心おろそかにと告白している。その限り、一たびは信心歡喜に触れ、天におどり地におどるほどの喜びに住したのである。しかるに今、その喜びは色褪せていた。喜びに代って、退屈の心がしのびこんで来た。「おろそか」と言われる限り、勿論無いのではない。だが現実は無いに等しいのである。かつての時、身をよろこばし心をよろこばした充実感、今や一片の記憶とさえ化して、倦怠の思いがしきりである。それと共に、燃えるようであった願生の心も失われて行く。急ぎ浄土へ参りたき心は影をひそめて、この世への深い執着が再びまざまざと露わになって来る。ここに「いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」という不審の表白されなければならない。なかつた現実があるのである。

この「いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」とは、痛切な響きを秘めた不審のつぶやきにも似ている。既に「おろそか、いそぎ」という言葉に、自分のはからざる現実に驚き自責する唯円房の、純厚な心がにじみ出ているのであるが、この不審の言葉を内にひめつつ、念仏の身にまざにあるべき踊躍歡喜の心、急ぎ浄土へ参りたき心のおろそかであることをいぶかって、その全てを告白して師の前に問うたのである。従ってそれは決して公の質問というような性格のものではない。宗教的生が、そのまざにあるべからざる自分のすがたを発見した時、それが念仏の身

にまさにあるべからざる現実である故に、ただ恥ずべく傷むべきものとして、ひそやかに問うた不審の間である。いわばこの時、凡そ宗教的生というものが本質的にひめている、真に問題とすべき問題が現前したのだと言ってもよいであろう。

唯円房の提出した問は、一応このような内容をもつものと了解することができよう。しかるに今、曾我量深先生の御指南によるならば、(歎異抄聴記)「念仏もうしそうらえども」とは、沈空の難を表わすものである。この沈空の難ということ、今一応無相の間、或いはもっと大胆に、無の間の現前であると理解することが許されるならば、この不審の根底には、容易ならぬものがひそんでいることが思われる。それはあたかも、師教との値遇においてわが身に与えられた徳を、いつしか崩壊させて行くが如きものである。「天におどり地におどるほどによるこぶべきことをよろこばぬ」といい、「浄土へいそぎまいりたき心のなくて」と言われる。念仏の身にとって、かつてあり、まさにあるべき心のところに、今や無がひそんでいたのである。その意味でこの二つの不審は、単に二つとだけ限定される問でなく、宗教的生が必ず遭遇しなければならない切実な問題、いわば無の障りともいうべきもの一般を包んだ問であると言ふことはできないであろうか。

思うに「本願力にあいぬれば、むなしくすぐるひとぞなき」と和讀せられてあるように、ただひとたびの廻心において「ただ念仏して」の師教に帰した者にあつては、空過の難は既に超えられたのである。本願に値遇してしかも猶空過ということはあり得ない。しかるに今、今更のように見出したものは、あたかも値遇のなかったかの如く生死する自身のすがたであった。空過を超越し得た身を、いつしか再び底知れぬ空しさと不安とがおびやかす。大悲無倦に反照して、そこには念仏すらものういわが身があった。それは先輩がいみじくも、「念仏往生の教えに遇いながらもさらに、はてしなき流転に身をおかねばならぬ自身の発見」(宿業と大悲)と描かれた光景であろう。唯円房のあの不

審を表白した言葉を繰返し誦する時、この言葉の背景に、私は何かこのような荒涼たる魂の光景を感じずにはおれないのである。そして恐らくはここにこそ、あの問の生まれて来た母胎があるに違いない。

三

『歎異抄聴記』の中に次のような、極めて具象的にして意味深い叙述がある。

「とに角問うところの唯圓は、(中略)何しろ年の若い青年でもあり英才でもある。年が若いから感情は單純で純粹であるから初めはどんなにか感奮興起して聴聞したに相違ない。だから一通り聞くと得意滿滿々として踊躍歡喜した。踊躍は「天におどり地におどる」、手の舞い足のまうところを知らぬ。とに角天地におどる意氣込みで御師匠様を忘れてしまった。御師匠様のいわれることはそのまま自分のものになり、その人の體驗は浅いが御師匠様の體驗を自分の體驗の如く心得て、そして大善知識様という旗をかかげた。併しそれもしばらくの間で忽ちにして夢さめ「念佛もうしそうらうども」といわねばならぬようになった。」

これによって思うに、ここに指摘されてゐるのは、師の教えに遇い、師の教えを受けながらも、その教えが真に自身の上に徹底しないという問題である。既に幾度か述べたように、たといこの不審のつぶやきが、如何に荒涼とした心象の中でつぶやかれようと、又、たといあたかも値遇しなかつたかのように生死する現実から生まれようとも、しかも値遇はまさしく現成したのであり、ただ一たびの廻心において、五体投地の懺悔と共に深く師教にうなずいたのである。それ故に、ここにあるのは教えに対する疑惑ではない。却って、この真実絶対の教の中にありながら、しかもまさにあるべからざる相をもってある自分のすがたに驚き、いぶかって、「いかにとそうらうべきことにてそうらうやらん」と問うたのであり、問われてゐるものは、どこまでも自分自身なのである。しかもこの身の現実のよって来

たった理由を「何故か」と問うのではなく、問うたのは、この心を「如何に」すべきかという實際問題である。それは念仏の身にして始めて起すことのできる問であり、語問には自ずと痛切な自責と慚愧の心がにじみ出ている。問がすでにこのような性格のものであったからこそ、唯円房は直ちに「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」という、師聖人の同悲同感の教えをたまわることができたのであろう。

再び『聴記』の文章に帰るならば、そこに今一つ、極めて示唆に富んだ事柄が語られている。それは、踊躍歡喜の思いの中に、唯円が師を忘れて、自らを大善知識と思ひなすという指摘である。教えの中にありつつも、師を忘れ、師を離れるとは、師教を私することである。思えばこれは決して単に偶然のでき事ではなくて、何か人間性の本質に属するような根深いものではなからうか。そして実は、この師を忘れて教えを私するという、まさにその間一髪のところに、やがて「念仏もうしそうらえども」という不審の生まれ来る情況の根はひそんでいたのだと言うことはできないであらうか。

私の思いはあまりにも恣意に走り過ぎたかも知れない。しかし、ここに至って我々は、自ずと「化身土卷」のあのいみじい言葉を想起せずにはおれないのである。

「真に知んぬ。專修にして雑心なる者は大慶喜心を獲ず。故に宗師は、彼の佛恩を念報すること無し、業行を作すと雖も、心に輕慢を生じ、常に名利と相應するが故に、人我自ら覆うて同行善知識に親近せざるが故に、樂みて雑縁に近きて往生の正行を自障障他するが故にと云えり。」

恐らくこれは、「信卷」真仏弟子釈の結びの「悲しき哉、愚禿鸞……」の表白と、深い脈によって結ばれている言葉であらう。今、その脈を辿ることはなし得ないけれども、金子大栄先生これを「難信論」の帰結とされたその釈意（教行信証講読）を思うばかりである。

四

沈空の難は、ただ諸仏の勸励をまつてのみ超えることができる。その故に唯円房は、師聖人に「いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と申し入れたのであり、且又、かく問うことのできる師があること、その師教に改めてうなづくことによつて、常に新たに初一念に立ち帰ることができるところに、師教の恩致ということがある。のみならず、唯円房の申し入れたのは、当面は自分の歎欣の懈怠を述べた、個人的問であるけれども、そこに深い自責と慚愧を感じ、それを通して宗教的生がその歩みの道程に於いて、必ず遭遇しなければならない普遍的な難、即ち無の障りというものを、「かたじけなく、わが御身にひきかけて」問を超えて読み取られたところに、更に深い意味での師教の恩致がある。「よくよく案じみれば」という言葉の重い響きは、この問の深刻さを反顧しているのである。こうして唯円房の問は、よくこの師教を開き、師教はよくこの問を包んで、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」と、師弟一味の境界を開示し、その間に一髪の間もないのである。

さて、この不審を受けとめての師教は、第一に「往生は一定と思いたもうべきなり」であり、「往生は決定と存じそうらえ」であった。もとよりこの言葉は、いわゆる逆説的表現といわれるものではない。却って真正面から、「弥陀の五劫思惟の願」を、よくよく案じみた時に、今新たに表白せずにはおれなかった本願へのうなずきである。個人の思いをこえて、法爾にそう決定している本願の道理に帰った時、疑わんとして疑うことのできない事実であり、その確信を語つて懇懃に答えたもうた教言である。そのうなずきの根拠を示したのが、「よくよく案じみれば……よろこぶべきところをおさえて、よろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしく

おぼゆるなり」と述べられた師言である。

この言葉は我々に直ちに、よく知られている第十九章の聖人の御持言を想起させる。即ち、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」という御述懐である。これは最も深い意味における本願の領受であり、表白されているのは、まさに本願生起の根源的光景である。この根源的うなずきを背景として、今の「かくのごときのわれらがためなりけり」という新しいうなずきは生まれて来るのであり、この無限に新らしいうなずきのみが「往生は一定」の確信を開いて来る。いうまでもなくこのうなずきにおいて、我々は如来発願の端的に触れ、その正機たる自身に還ることが出来るからである。その意味で、ここに展開されて来たのは、実に本願の世界であったと言ふことが許されるであろう。

このように見るならば、いわば機のはからいから提出された唯円房の問は、師教においてまさしく本願の世界を背景として、この身にあるべからざる歎欣の懈怠という現実を、よくよく案じみることによって、それを「煩惱の所為」という根本的事実に還し、これによって今更のように悲願の広大の旨を思い知ることとなったのである。

しかも、一たび他力の悲願に思い至ったならば、「よろこぶべきところをおさえてよろこばせざるは、煩惱の所為なり」という言葉が、千鈞の重さを以て響いて来る。『歎異抄聴記』に聞くならば、そこには「衆生が仏と戦つてゐる。妄念妄想が如来の心を知らずして戦つてゐる」というすがたがある。ここに至って我々は、自らの煩惱の深くして底なきことを、深く痛まねばならない。「念仏もうしそうらえども、踊躍歓喜のころおろそかにそうろうこと、また急ぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬ」ことは、今師教に照らしかえりみる時、実は煩惱の所為以外の何ものでもなかったのである。そこに感得された荒涼たる光景は、実は如来の願海にありながらも、如来に背き、如来

と闘う衆生の、絶望的な状況に外ならなかったのであろう。あるべからざるすがたを以てあるとは、願心生起の本である罪惡深重煩惱熾盛のわが身の事実を、踊躍歡喜の思いの中ではからずも忘れ去ったことによる、当然の罰であつたのだろうか。そこに「如来広大の恩徳を迷失する」(眞仏土卷)と言われたことも、思われるのである。

従つて今、「煩惱の所為」という師教を聞く時、ひそかに思われるものは、これは一唯円房に対する答え以上の意味をひそめていることである。それは自らの不喜不快の悲傷をこめて、凡そ人間の本質即ち一切衆生の相を自分の上に「よくよく案じみ」られた聖人の、深い懺悔の言葉であらう。この懺悔の中に、如来發願の本である「煩惱具足の凡夫」に立ち帰る。ここにこの師訓の眼目があるのであらうか。そしてこの師訓によって、自分の現実を「煩惱の所為」と思い知つた者にして始めて、「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられた」その悲心に、深く深くうなづくことができるのである。

改めて思えば、「煩惱具足の凡夫」とは一つの教である。まさにあるべからざる相を以てある自分のすがたに驚き、悲歎するに先立って、如来の悲心はかねてこれを見、如来の悲願は既に発せられてあつた、その如来における衆生の發見である。この喚びかけによつてのみ、我々ははじめて煩惱具足の自身に目を開き、立ち還るのである。この喚びざまされて今や真に宿業の身に還つた表白が、「他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」という言葉である。喚びかけに遇うて目覚める。ここに宗教的生の秘義があらう。人はわが身を「よくよく案じみる」ことによつて、思いを尽くして煩惱の所為に思い至ることができる。しかしながら、「煩惱具足の凡夫」と思い知るに至ることは、恐らくは不可能であらう。煩惱の所為という自覺と、煩惱具足の凡夫に目覚めることとの間には、何かしら大きな断絶がある。ただ教え、即ち既にこの我を發見し、かねてしろしめして我を喚びたまう「仰せ」に帰する時の断絶はこえられて、曠劫已來の自身の相に目覚めることができるのである。そして、呼びかけと応答といわれる

ように、そこに眞の呼応關係が成り立つ。眞に呼びかけを聞いたものは、眞にそれに応えるものであり、又応えなければならぬものである。「かくのごときのわれら」とは、まさにその応答の表白に外ならない。ここに宗教的生の躍如たる面目さえ、感ずることができるのである。

ひるがえって思うに、若し『歎異抄』の中に、まさしく自分のすがたを言い当てた言葉を求めるならば、我々は勿論、幾つかの感銘深い言葉を見出すことができる。その中で、最も切実な響きをひめて身近にあるものが、「かくのごときのわれら」という言葉である。勿論のことこの言葉は、單なる代名詞に過ぎない。しかしその含蓄する内容は宗教的生の底深い問題を表わしたものである。その内容に心をひかれて、私はこれまでまことに主観的な思いを綴つて来たのであるが、今再びこの文字を読むならば、そこには「かくのごときのわれら」と複數形を以て主体が語られている。われらとは勿論師聖人と唯円房とを指す。しかしながら又、唯円房は單に一唯円房ではなく、既に繰り返し述べて来た、あの不審の問を問わずにはおれないものを代表するとすれば、この唯円房は同時にそのままこの自分であり、ひいては十方衆生である。従つてこの「われら」とは、師聖人と唯円房であると共に、又、師聖人と自分であり、或いは自分と共なる師聖人である。

聖人は常に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と仰せられた。「われらがためなりけり」には、「親鸞一人がためなりけり」という背景がある。そこには「かたじけなく、わが御身にひきかけて、我等が、身の罪惡の深きほどをもしらず、如来の御恩の高きことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり」というでき事がある。われは、念仏の身にあるべからざる現実に遇つて、不審に沈むものである。「われら」とは、「かたじけなく、わが御身にひきかけて」そのわれを、われに先んじて包む師教であ

る。よき人の仰せである。師教の恩致ということば、ここに最も身近に感ぜられるのである。

もとより、第二章に伝えられるあの秋霜烈日の如き嚴肅さに、師聖人の真の面目はあるであろう。それと共に今私は、第九章のこの言葉に、限らない師聖人の慈眼を感じるものである。ここに於いて、「父のごとくにおわします」魂の師父に接するのである。この慈父の護持養育をまっご、我々はそこに於いて真の「われ」が誕生し、また常にそこに立つべき信の一念に常に新たに帰ることができる。そしてこの時、「われ」として無限の励ましを頂いた「われ」は、この師教を背景として、再び無辺の生死海に向かって独り立つものである。